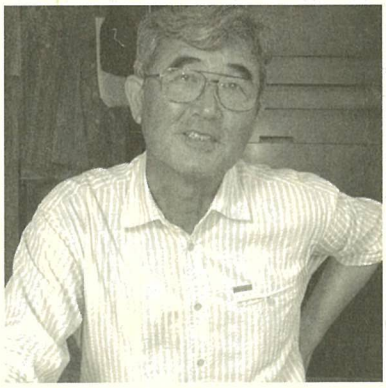
2009／秋

季刊　福井県和紙工業協同組合

和紙だより

―越前和紙への提言―



■宍倉 佐敏（ししくら さとし）
1944年沼津市生まれ。日本大学短期学部卒業後、特種製紙総合技術研究所入社。40年にわたって、製紙用植物繊維を主に画材用紙、保護・保存用紙、ファンシーペーパー、再生紙の開発に携わる。退職後、自宅にて「宍倉ペーパー・ラボ」を設立し、繊維分析、紙鑑定などを行っている。日本鑑識学会会員（紙分析）。紙の博物館・陀羅尼会会員。女子美術大学大学院非常勤講師。東北芸術工科大学非常勤講師。著書「製紙用植物繊維」「中世和紙の研究」特種製紙刊、「和紙の歴史」（財）印刷朝暘会刊。

■宍倉佐敏さん（紙繊維分析・研究者）
「伝統に甘んぜず、技術開発にも意欲を」

●洋紙メーカーの研究所から

私が永年勤めていた特種製紙は、元大蔵省印刷局の抄紙部長だった方で、日本で最初の紙の博士となった佐伯勝太郎さんという方が、大正十五年、退官して創業した会社です。研究が重要視された会社で、研究所には一流大学の林学部出身の人などが多くいました。ひょんなきっかけから同社に入らないかと言われ、実験のお手伝いのような仕事から始めました。折しも、パルプが貿易自由化になり、アメリカやカナダから原材料が多く入ってくるようになった時期でした。研究所ではパルプのことを研究していなかったので、輸入国の植物を研究しておく必要があると思い、論文を社内報に出したのです。アメリカ、カナダではこんな木が生えていて、それをパルプにするとこういう性質があり、紙にするとこういう紙になる、というような論文です。この論文が上司の目にとまり、富士市の県立製紙工業試験場で勉強させて頂くことになったのです。そこでは特殊紙ではなく、紙一般についてたたき込まれ、新聞紙、ノート、段ボール、印刷紙などありとあらゆる紙の製法について勉強しました。紙のことは門外漢でしたが、研究所に入って集中的に勉強し、化学のことも分かるようになりました。当時、「製紙工業試験場」の名刺を持っていくと、全国の製紙会社はフリーパスで入ることができたので、いろんな紙を見せてもらいましたし、製紙用の薬品メーカーにもかなり自由に出入りさせていただいたので、製紙用薬品で知らないものは殆どありません。

●新しいものは和紙に学べ

会社は洋紙専門でしたので、二十年ほど洋紙ばかり見ていましたが、和紙に取り組むようになったのは、アメリカのウエアハウザーという世界第二の木材会社に研修に行ったのがきっかけです。紙関係の人からよく和紙のことを質問されました。研修の目的は大量に出る同社のノコギリクズから特殊紙を開発するというもので、後にOCR用紙（光学式文字読取用）やファンシーペーパーの開発に結びつきました。ファンシーペーパーの「タント」は、長い繊維と短い繊維に染まりやすい染料を使い分けることで、色紙なのに裏表の差がありません。日光やガスにも変色しにくい紙で、ひとつの紙で一五六色もあるのは世界でもこの紙だけです。裏表がないのでノートや本の本文頁、アート関係にも用途が広がりました。

紙の原料、配合、煮沸、薬品など
全て詳細に記録してあるノート

帰国後、水上勉の「弥陀の舞」という小説を読んでこれは面白い、和紙のことを勉強しなくてはと考え、美濃へ日参することになりました。皆さんにいろいろ教えていただき、和紙で勉強したことを充分活用させてもらって、新製品に応用していきました。岐阜工場から三島に帰ってきて、休日に自宅で紙を漉き始めたのもこの頃です。

庭の片隅に置かれた煮熟用釜

又、宮内庁書陵部や公文書館、国会図書館などの所蔵文書の原料分析などを依頼されるようになり、奈良・平安を始め時代時代の貴重な紙を分析することができました。例えば、箱根MOA美術館所蔵の国宝「紅白梅図屏風」の紙の復元や高野山正智院に伝わる中世和紙の分析などです。前者は日本の紙ではなく中国の竹紙でしたし、後者は溜め漉きと流し漉きの中間の製法があることが分かり「半流し漉き」と命名しました。

●技術開発の相談

平成十七年、私の今まで蓄積してきた紙の知識や技術を残し、利用していただきたいと思い、小さなラボを開設しました。紙の繊維分析、調査研究、試作、講演活動などを業務としています。和紙から多くのことを学びましたので、お返しをしたいと考えています。ところが和紙関係の方からの相談は今まで皆無です。まあ、紙を漉いて食うことに精一杯で暇がないのかもしれませんが、少し不勉強なのは残念ですね。こ

んな時代ですから、新しい紙や技術開発、現代的なニーズに合わせた製品改良などにも挑戦して欲しいものです。例えば、機械漉きのような大ロットは要らないけれど…というような場合でも、手漉きなら小さなロットにも対応できますし、そこに両者の中間の製品性能を入れ込むこともできます。このような視点で考えると開発できるものは沢山あると思います。また、アーティストやデザイナーに広く使ってもらうためには、わかりやすい規格を示してあげないといけません。匁（もんめ）ではなく、坪量（1㎡あたりのグラム数）で表示してあげないとプロのユーザーは使いたくてもピンと来ないのです。買う人は想像以上に和紙のことをよく勉強していますよ。

まず、自分の作る紙の詳細な記録を取ることからでも、始めては如何でしょうか？材料、加工時間、製法の工夫など、記録する習慣を付けておくと、技術的なアイデアを思いついたりするものです。

博物館などに分けてあげることもあるという栽培しているパピルス

■襖絵デザインコンペティション2009 関西襖内装事業協同組合 主張する襖絵を求めて！

コンペ事業主幹の辻将士さん

関西襖内装事業協同組合は、昭和四十七年、大阪、兵庫、奈良、和歌山の公営・公共住宅を主体に営業する大手襖内装業者十九社で設立された。旧住宅・都市整備公団（現在のUR都市機構）が建設する住宅の襖工事をゼネコンからではなく施主より（「分離発注」という形で）直接受注を認められた数少ない業界団体である。何万軒という公団住宅に襖を均一な品質で、安価に、安定供給するという仕事を、組合という公的な色合いの強い組織で永らく受注してきた。

襖紙の生産は通常数万枚単位。それらは輪転機で効率よく印刷にかけられ、三〇〇～五〇〇メートルの巻物で出てくる。パネルも襖紙同様に従来の和骨よりも加工性の良い発泡スチロールを用いたパネルが採用された。組合各社は、襖紙とパネルと縁をアセンブリーし納入する。公団住宅は今も昔も和室の割合が多いうえ、和洋折衷リビング襖の採用はあったものの、住宅の洋風化に伴う襖の落ち込みという点では、少し様相が違う。それよりも住宅都市整備公団の組織改革のため、近年需要は激減し組合員も十四社になった。しかし民間のディヴェロッパーの集合住宅やマンション、ハウスメーカーの注文は継続している。

二〇〇九年、組合青年部八人を中心に、襖の存在価値の復権と実務を繋げる「襖絵デザインコンペティション2009」が企画され、三六八点もの応募作品があった。事業主幹の青年部部長、辻将士さんにこのコンペの狙いと思いを伺う。

●コンペの背景

小ロットの襖紙は切紙（切られた紙）で入手して手で貼るが、集合住宅用の襖に使用する襖紙は何百メートルという巻物で入手し、ラインになった機械で襖に貼る。それ故、柄の連続性が途絶える「すそ柄」や「絵」のある襖紙は排除され、総柄と呼ばれる全面柄が主流となっている。「京都や奈良の古い家屋では襖は一枚の『絵』なのですが、私達は機械による襖の量産工場であるために、その辺りを狙うわけにもいかなくて、クリーム色の無地の無難な総柄になっていくわけです。そんな個性の無い襖紙に慣れた現在のコーディネーターやお客さんは、部屋にクロスを貼って、襖紙をどうしますかといわれると、見本帳を見るのではなくて、いつもみたいにクロスに似た色の襖紙にしてくれとおっしゃる。一番きついのは置き家具の邪魔をしないでくれと言われる時もあります。個性の無い襖を大量に作っていた自分達が招いた結果とはいえ、悲しいことに購買層は襖に全く興味がないのです。」しかし、ある時、住宅メーカーのオリジナルの染め柄の襖を見せた時、即座に客はこれを入れてくれと言われたそうだ。縁や引手ではなく襖絵さえいいものがあれば、お客さんは必ず襖をとるという確信が湧いた。「唐長さんみたいに高価な紙は買えないけれど、そういうイメージのパタンがリーズナブルな値段であればいいし、パタンがよく吟味されているデザインであれば、充分おしゃれに見えるのです。京都や奈良や地方の古民家などには勿論襖は残ってゼロにはならないでしょうが、普通の住宅では、今、襖というものに商品的な魅力を持たせないと、確実に襖はなくなっていくという危機感があるのです。」

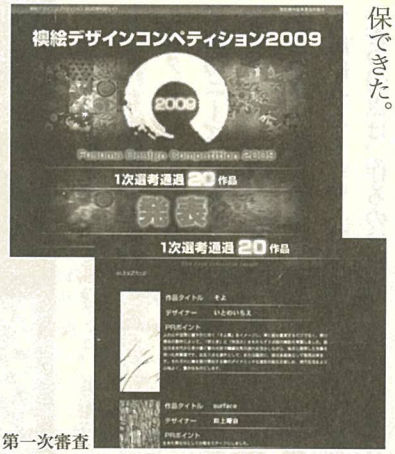
●主張する襖絵を商品化

「襖デザインコンペティション2009」は、商品化できる襖絵の創出と襖デザイナーの発掘と地位向上を唄っており、同時に商品化によって襖に今一度人々の目を向かせ、普及させるという狙いがある。審査員との懇談会では、襖の機能や構造まで広げた提案は今回のコンペの主旨ではないことが確認され、あくまで襖絵そのもののデザイン提案に絞り込むことと

8月6日「大阪からかみ屋」での第一次審査風景

コンペチラシ

なった。広報担当のメンバーは、関西圏のデザイン系大学や専門学校四十校余りに出向き、趣旨説明や学生の参加などを呼びかけた。その結果、中には授業のカリキュラムの中に取り入れてくれた大学もある。受賞作品は、その後市場ニーズを考えながら改良を加え、こなれた商品となるよう組合がプロデュースしていく。コンペ受賞作品となると、営業の面でもコーディネーターなどに採用されやすいのではと実利も忘れない。またコンペを通じて得た人脈は、業界にとってこれからの財産になると、辻さんは言う。運営費用は初年度四百万円、協賛金や組合員の分担金を広く募り、予算も確保できた。



第一次審査
選考作品はウェブサイトからごらんになれます。
http://www.fusuma2009.com/

七月末で応募は締め切られ、三六八点の作品が集まった。八月十日には第一次選考作品二十点を発表。抽象的なパタン、日本画風のもの、書の様な趣のものなど、襖絵は「主張」している。最終選考作品六点は、九月十六日、大阪南港のインテックス大阪で開催される「リビング&デザイン」展で展示され、来場者の投票も考慮された上、十七日受賞作発表と総評が行われる。組合にとっては初めての取組だが、継続することによって周知や注目が集まっていくため、コンペは来年も継続して行われる予定である。

漉き場探訪

なつかしさ漂う静かな工房

■信洋舎製紙所…西野正洋さん
「素材産業からの脱却を模索しないと」

漉き場が多く点在している旧今立町の大滝から少し離れた、定友町の山側の何とも静かな地区に信洋舎製紙所はある。現在、西野正洋さんが一人できりもりしている小さな漉き場だが、岩野平三郎さんに越前伝統の技法「打ち雲」教えたのは、実は、この漉き場の屋号「弥平次」といわれる二代目だったという。昔から奉書を漉き、明治政府によって発行された日本初の紙幣、太政官札の紙も漉いた。その後印刷特性に改良を加え、紙粉がない三椏局紙を開発したのが、信洋舎ということになっているという。又、ダード・ハンター『製紙術』の紙史年表によると、紙の叩解作業効率化のためにオランダで一六八〇年に開発されたホーレンダー・ビーターという機械は、日本では紙幣寮抄紙部で明治九年（一八七六）年に初めて使用し、福井県岡本村の信洋舎が明治二十三（一八九〇）年に購入しているとの記録があるそうだ。興味深い時期に断片的に登場する信洋舎だが、この時代の歴史資料には空白が多く、現在「越前和紙を愛する会」でも掘り起こしを始めたところだ。正洋さんは五代目ということになってはいるが、それ以前から紙漉きはやっていたそうで、詳しいことはわからないと笑う。

●今、時代の転換期！

和紙のイメージというと「流し漉き」ですが、うちは「溜め漉き」です。溜め漉きというと、ここではちょっと亜流と見られる雰囲気もあるのですが、ヨーロッパのやり方を持ってきて、和紙の原料を使って紙を作っていた。高度成長期になると三椏紙もいらなくなり、原料もパルプに切り替えて、葉書や名刺、小間物などの紙を作るようになりました。越前は、永年の技術の蓄積をどこでも、みんな持っているのですが、これを生かし切れないうちに家業をたたんでしまうところも多いのです。何故かと考えてみると、その一原因は何事にも時間がかかりすぎるということがあると思います。面白い紙を漉いて問屋さんに持って行っても、三ヶ月も五ヶ月も待たされて、何も前に進まない。ひどい時は一、二年待たされて、挙げ句の果てに他所には売っていけないと言われるし、まさに機会損出という言葉がピッタリ！結局待っても何一つ話が決まらないので、在庫をある程度抱えて自分の所で面白いものを作ってやろうと乗り出したところです。昔は紙さえ漉いていれば、問屋さんに買ってもらえた。でも今は、完全に時代の転換期だと思っています。これ以上、先がないから何をしても、かえって許されるのじゃないかと思っています。

●バラバラのニーズを膝つき合わせて

産地の人はエンドユーザーがどんなものに触手を動かすか、肌感覚ではよく分からないし、ましてや今まで漉いた紙が何に使われているかさえ知らなかったのです。といいますか、昔はけっこうそれでも紙は作れば売れたので、「遊んでる暇があれば紙を漉け！」と言われたもので、商品としての紙のことをよく考える暇もなかったということです。今は暇があるので（苦笑）、反対にチャンスだ！と思っているわけです。

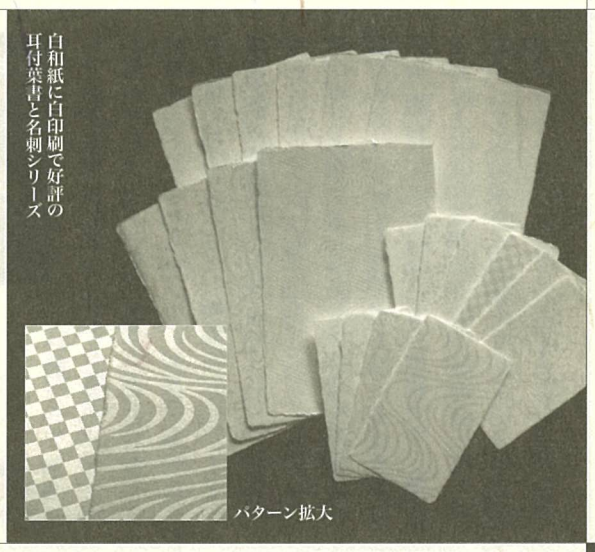
問屋さんに「何か新しいものないか？」と言われても、素材としての紙しか作ってこなかった漉き屋はどうやって作ればいいんです？何の資料もなくて、どんなものがあるのか、どの年代をターゲットにするかの戦略もなくて、メクラめっぽう新しいものを作れと言われても、作りようがない。問屋さんの中には未だ高度成長期のくせで、大ロットで大きな商いをしたいという考え方の人もいるようです。今は、小ロットで多様性があって、小回りがきくというのが時代にあった、特に小間紙の作り方なのかあと考えるのですが…私達が望む問屋さんの役割は、商品企画力を持って欲しいし、私達に市場の情報を吹き込んだり、零細では対処できないクレームの対応などです。和紙に印刷がうまくできない時もすべて製造者の責任になりますし、手漉き紙を工業製品のような規格

五代目の西野正洋さん

にすべて合わせてくれと言っても、無理なのです。それも流通の人に紙の知識がないので、起こるクレームも大変多い。

市場のニーズ、流通のニーズ、問屋のニーズ、紙屋のニーズ、バラバラなので一回膝つき合わせて話さなくてはなりませんね。そういう取組を和紙組合などにやって頂きたいですね。産地の一番の弱点は、作るのは得意だけれど、売り方を知らないということです。この辺をみんなであの手この手で考えて、素材産業から脱却しないといけないですね。

昨年、正洋さんは、耳のある和紙に白の伝統柄の印刷をした葉書や名刺を作った。白い紙に白い模様というのが「地味派手」でしゃれている。大人っぽくてシンプル、なおかつ豊かな伝統も感じさせる美しい紙は外国人にも受けそうな完成度の高いデザインだ。捨て身の姿勢で開発したこのシリーズは評判がいい。健闘を祈ろう。



白和紙に白印刷で好評の耳付葉書と名刺シリーズ

和紙ミニコーナー

■「越前和紙の里　夏フェスタ」開催

毎年、越前の和紙の里でおこなわれる伝統行事「かわそさんまつり」に合わせ、第三回「七夕まつり・夏フェスタ」が八月一日から十六日の二週間にわたり開催されました。

あいにく今年は天候が安定せず七夕の飾りつけ、屋台の実施など思うようにいかないところもありましたが、一日夕方から天候も回復し、岡本地区の夏祭りの賑わいの音をバックに、せせらぎに浮かぶ光と人形の影がゆらめき、なつかしい日本の夏を感じていただけたのではないでしょうか。

また本年は、様々な角度から和紙の里を楽しんで体験していただこうと「和紙の里満喫ツアー」を実施。七夕コンテスト・屋台市・風鈴市・和紙の里カレー・和紙の里カフェ・豆本作り体験・本格的紙漉き体験など、楽しくて、興味津々な企画を満載しました。参加者は、地元案内人の説明を聞きながらの和紙の里周辺散策やエスニックランチを楽しんだり、職人の指導の下、工房で本格的な大判の紙を作るなど、充実した企画に大満足でした。

夏祭り主会場、和紙の里の飾り付け

情報欄

●イベント情報

■丹南産業フェア2009
時：9月19日（土）～21日（祝）
場所：サンドーム福井
テーマ展示--世界の三ッ星をめざせ：2009年1月23日-27日、杉原商店のメゾン・エ・オブジェ見本市に出品された「あんどん」、組合海外展で展示された「創作屏風」、明治の先達が開発し好評を博した光沢紙「パリ万国博覧会金牌授賞賞状（1900年;信洋舎）」「セントルイス大博覧会名誉大賞牌授賞賞状（1904年;越前製紙組合）」の展示をはじめ、世界一の手漉き和紙「平成大紙」をパネルにて紹介します。

■第28回全国伝統工芸士大会（京都大会）
時：10月28日（水）
場所：京都会館

■第26回伝統的工芸品月間国民会議全国大会（記念式典）
時：10月28日（水）
場所：京都伝統工芸大学校

■2009伝統工芸ふれあい広場・きょうと
時：10月29日（木）～11月1日（日）
場所：京都市勧業館　みやこめっせ

■和ッショイいまだてin 和紙の里
時：11月21日（土）～23日（祝）
場所：和紙の里（越前市新在家町）　バザー・イベントあり。

■新刊紹介
アメリカの紙史研究の国際的権威ダード・ハンター（1883-1966）の著書の翻訳2冊が、9月初旬に開催された「Frineds of Dard Hunter-- 東京展」を機に出版されました。

「古代製紙の歴史と技術」
ダード・ハンター著　久米康生訳
2009年8月25日
勉誠出版刊　5000円（税別）
1943年発行の「Papermaking: The History and Technique of an Ancient Craft」の日本語訳。
世界各地の紙産地40余国を現地調査した著者の集大成ともいえる本で、東洋西洋の紙を比較しながら図版を交え、系統だった紙史としてまとめられている。

「和紙のすばらしさ」
ダード・ハンター著　久米康生訳
2009年8月25日
勉誠出版刊　2800円（税別）
「現代日本の手漉き紙は、全世界の紙工業を通じてまさに技術上の奇跡である」と和紙の評価を定着させた一冊。原題は、「日本・韓国・中国への製紙巡礼」となっている。

※なお「Frineds of Dard Hunter--東京展」関連イベントの模様は、次回冬号で紹介します。

編集後記・今号にご登場願った宍倉さんは日本鑑識学会でただ一人の紙のエキスパート。ある時、殺人現場に慰留されていた紙袋分析を鑑識から依頼され、調べたらインド綿で作られた紙だったそう。その分析のお陰で、殺人犯はめでたく御用！となったそうです。テレビドラマにでもなりそうなお話です。（よ）

季刊・和紙だより 第24号（2009年秋号）　発行日：2009年9月15日
発行人：福井県和紙工業協同組合　山田益弘　〒915-0234　福井県越前市大滝町11-11　TEL: 0778-43-0875　FAX: 0778-43-1142
編集所：右衛門佐美佐子事務所　〒606-8225　京都市左京区田中門前町90　TEL: 075-712-8834　FAX: 075-702-6223　E-mail: m-yomosa@smail.plala.or.jp
編集人：右衛門佐美佐子・田中裕子
※無断での転写・転載はお断りします。